

彦一について

(社) 八代青年会議所「ふるさと百話総全集」より

昭和五十一年六月一日 江上敏勝氏 著

彦一のとんちばなしは、全国的に有名であり、八代地方民話の代表である。また数多くの話が語られている。はなしの中心人物「彦一」は、江戸時代八代城下の出町に居住したといわれ、出町の光徳寺には、墓所のすみにこけのはえた丸い石が彦一の墓と伝えられていたが、いつの間にか消えてなくなっている。

光徳寺の過去帳によれば、「安政三年(1856年)正月四日出町彦市祖母、同五年(1858年)六月五日出町彦市娘・天明四年(1784年)十月二十八日出町彦市娘」とあり、彦一と妻の法名は見当たらない。これによれば、彦一の過去帳は、下の字「一」「市」が違っている。伝えによれば彦一の墓は、同寺の住職で東本願寺の八代目、学頭に任じられた易行院日南の墓の後にあったといわれている。人物についての具体的な資料にはとぼしい。とにかく、実在の人物か、架空の人物かはあきらかでない。

藤沢衛彦著「図説日本民俗学全集2」によれば「江戸時代の辻講談や落語家が創作した、時代を反映した創作民話とってよくフィクションがそのまま聞き手にとられて、地方にもって帰られその郷土にいついて、新しい民話の構成をとったものである。例証としては、大阪の噺家彦八が話した「彦八話」が、江戸・兵庫に移入されてはそのまま「彦八話」であったが、九州に移入されでは、「彦八話」「彦一話」「吉四六話」として伝承されていたことである。」と記されている。

彦ゆかりの光徳寺境内には彦一塚が残っている。高さ二メートルほどの大理石で昭和二十六年十一月三日、八代民話会同人建立と刻まれている。塚のかたわらに立つ建立趣意書の文句には「・・・出町の彦一はその生日、命日を知らず、さりながら八代の民話は彦一話の外を出でず。伝ふらく彦一は鬼才縦横、頓智自在、狐狸をたぶらかし天狗を友とし、庶民等しく之を親愛し、その朝夕の話題に供して天地を明朗にす。・・・彦一は現代日本民話の総元締めにして、その名つとに高し。・・・」と記されている。

彦ばなしについては、木下順二氏や小山勝清氏をはじめ、日本談義の荒木精之氏らによって紹介され作品化されている。

彦一は、八代城下の町人で物語から得られる感じは、心の正しい善人として扱われている。年配は子供でもなく、老人でもない。むしろ三四十歳の働きざかりで、妻子があり、生活程度は低く、その日暮しとして語られることが多い。家も長屋住まいらしくどんな職業であったかは、はっきりしない。

彦一についての話は、頓智ばなしで、難問奇問でも即答でき相手はまいってしまう。彼の既知は、すばらしく幾多の難関がきりあけられ、また助けられている。話に出てくる八代の殿様は松井氏で、どの殿様であるかは不明。おそらく江戸末に関係あると

思われる。

また、城下の悪い役人や、金持ちをこらす庶民大衆の全面的な味方としてたたえられることも少なくない。話の内容では、大きな体格でもあり、気やすくユーモアたっぷりの性格であったらしい。話の中心人物は、常に庶民であり、その対象には天狗・狐・狸のように人生をだまかすような、神通力をもっており、町役入たちを、とんちで閉口させ、庶民を勝利に導く方法が多い。ここで注意したいのは、とんちや機知といったものは、人間自身の能力であって、超人間的な神秘力ではないということである。

昔話には、時々人間の力では、とうてい及びもつかないことをやってのける英雄、言いかえれば特別の神秘力をもつ英雄が登場するが、彦一は、つまりいても、ころんでも、けたおされても起き上がって強く生きてゆくことを捨てない人物、困ってもくよくよしない行動力をもった人物として、民衆のちえの伝統の中で育てられてきたのである。つまり彦一は、民話の世界に生きる民衆の分身であった。つまり民衆自身であったと言えるだろう。

彦一ばなしの内容を概観してみると、貧しい彦一であるから大晦日の苦労話や、死んだふりをして借金とりを追いはらってしまう話や、おいはぎをだまして刀をとったりする話をはじめ、かくれみのをだましとられる天狗など、彦一ばなしの範囲は幅広いものがある。

彦一話第一集・第二集に出てくる地名には「野上・萩原堤・中島町・出町・竜峰山・八代城・平山・高田（こうだ）・日奈久・三官（さんかん）・松馬場・小川町・球磨川・古麓（ふるふもと）・妙見さん・日向の生目八幡宮・光徳寺」などがある。

また、有名な話には「竜峰山の天狗（かくれみの）、ガラッパ釣り、はなせ・はなせ、タヌキのまんじゅう、あまんじゃく、彦一のさいなん」など非常に数も多い。

とにかく、無学な彦一は、智恵や才覚があり、伝えによれば、小さな雑穀屋、かさ屋、百姓であったりして一定しない。狡猾（こうかつ）者でもあり、細君は毎晩、酒買いにとっくりをもって出かけたり、貧乏な暮らしゆえ、生活全般に苦労しながら、とんちをはたらかせている点は面白い。また、八代人気質にも殿様をからかい、窮地をトンチで切りぬける「彦一話」から、八代人独得のユーモアなレジスタンスの精神が汲み取られるようである。

八代市出町では昭和五十年七月三十一日と八月一日の二日間、商店街を中心に「彦一祭り」が昭和二十九年七月に第一回が行われて以来十八年ぶりに復活した。民話の主人公を主役に、町ぐるみのお祭りを展開するのは、ユニークな発想といえる。とにかく「彦一ばなし」が広く全国に、熊本の代表的民話として語りつがれることを期待したい。